

「いのちの授業」を考える

いのちの大会（十月八日）メッセンジャーから



全国から仲間が集い、熱く、本気で、楽しく語りました。

石川 雅春

（西尾市立東部中学校校長）

西尾市立東部中学校の校長の石川です。「いのち」に寄り添う教育の一端をお話します。

コロナ禍の中、命を守る教育活動を祈るような思いで取り組んでいます。命の授業は全教育の核となるものです。

当校では、一九九四年十一月、いじめを苦に生徒が自死しました。臨時生徒集会で、生徒自身が「自分たちの手でいじめをなくす組織をつくろう」と呼びかけ、自主的組織「ハートコンタクト」を立ち上げ、二十七年間継続的に活動を続けています。

その目的は、安心して学校生活が送れるようにする、いじめを撲滅する、思いやりの精神を育てることです。十一月には、いじめを考える集会を開催。一年生は亡くなった生徒の遺書を読み、命日には代表がお参りをしていました。

自死した生徒のお父さんの講話も続けました。「志ある子どもたちが活動が続けてくれて感謝です。」

人に嫌な思いをさせない、辛いことがあったら素直に周りの子に伝えてほしい」と語られました。

どの学校でも、学習指導要領に基づき「命の教育」に取組んでいます。しかし、表面的な授業に終始したり、家庭や社会の多様な化や教師の多忙化などにより深い実践に踏み込めなかったりする課題が挙げられます。

そこで、命の教育の質を高めるために、ここでは特に、共同体を意識した実践と本ものとの出会った実践について紹介します。

共同体意識は、生徒全員で一つのものをつくり発信することです。つながり意識を育むものです。コロナ禍の中で、市民病院や市役所の人に、全生徒が感謝のメッセージを綴りフェニックス（2×3M）にして届けました。

鉄道事故で乗客の命を助けた、小説「塩狩峠」（三浦綾子著）を題材にした道徳教材をつくりました。本物と出逢い、人の心を思い語りました。

これからも「いのち」に寄り添う教育を進めてまいります。

玉置 崇

(岐阜聖徳学園大学教授)

鈴木さんと共著で、『いのちの授業』をつくる」を出版しました。その思いをお話します。

子どもの自殺が四七九人、過去最高になっています。その要因に、孤立・人間関係のトラブル・いじめ・サポート不足など、人とつながれないことがあります。確かに、対人関係が弱い子どもがいます。「それでもいいよ」と言っておきたいと思いますが、教師は、一歩でも二歩でも社会化を促さないといいません。

その一策として、「心の天気」があります。子どもと教師のつながりを強める情報端末を活用したアプリです。子どもが端末に、今の気持ちを「はれ・くもり・あめ・かみなり」から選び入力します。教師は、子どもの気持ちや心の変化をとらえることができます。

「心の天気」を活用している学校からは、「子どものさり気ない一言でつながりができる」「教師の机の周りにこない子どもの『心の天気』が参考になる」「先生、〇さん

はいつもひとりぼっちだと知っている？と伝えてくれる」などの声が届いています。「教師が子どもをとらえやすくなった」「子どもが自分を客観的に見るようになった」といった成果報告もあります。

学校は、家庭の経済的背景の影響を受けることがあります。その一例として、就学援助率（経済的補助を受けている家庭比率）が高いほど、全国学力テスト平均正答率が低くなることがあります。

しかし、就学援助率が高くてても正答率が高い学校があります。その学校の子どもたちは、「先生は私の気持ちを分かってくれている」「先生は私に期待をかけてくれる」「ふだん、学校で先生と話をする」と、答えています。つまり、子どもと教師の関係性がとても重要なのです。

学級経営は、「愛されている存在」を伝える営みです。子どもは、教師の愛を感じた時、「自分はここにいていいんだ」「いる意味がある」と認識します。

今こそ、「つながり」をキーワードにした取組みが求められています。

鈴木 中人

(いのちをバトンタッチする会)

新刊本「いのちの授業」をつくるから、「いのちの授業」は何をどう学ぶのか、子どもたちに伝えたいメッセージをみつめてみます。

千校を超える学校を訪問しました。学校現場では、「子どもたちが『いのち』を大切にほしい」と願いながらも、現実の壁に戸惑っているとも感じています。

小学校の先生から感想文が届きました。「この子は、六年生ですが漢字が書けません。感想文に胸が熱くなりました」。その感想文は平仮名ばかりです。

「とうさんかあさんにめいわくをかけてばかりです。なんのとりえもありません。なにかないかとかがえて、とうさんかあさんよりはやくしなないにしました。がんばっていきっていきます」

この子は「いのちを大切にしよう、生きよう」と書いてくれました。なぜでしょうか。「いのちを実感する」「いのちの真理を知る（人は生まれて、生きて、死んでいくなど）」「どう生きるか」を学

んでくれたからです。この三つこそ「いのちの授業」の命題です。

実は、「いのちの授業」を始めた頃、「生きられない子もいる、一生懸命に生きるんだ！」「人は変えられる」との思いがありました。

思い上がりでした。ひとり一人に背負っているものがある。押し付けるのではなく、その人なりに「いのち」「生きる」「大切なこと」とはを問いかけてもらえばいいんだ、と気づきました。

「子どもの目線に合わせて学び合う」「いのちに向き合う体験を重ねる」「答えを急がずに信じる」「自分の思いと言葉を添える」。今、そんな眼差しを大切にしています。

子どもに伝えたいメッセージとして、二十話を綴っています。「助けてーと叫んでいいんだよ。助けでは、逃げ道ではなく生きる道です。『幸せは自分の心が決める』。だいじょうぶ、きつと幸せになれるから。更に、学校現場での「いのちの悩み」にも、私と玉置先生が答えています。

「いのち」を育む道しるべとなる、心響く本です。学校や家庭に届けていただければ幸いです。